新潟工科大学研究紀要　第12号　2007年12月

Electronic Beowulf の glossary について

小山　良一*

（平成１９年１０月３１日受理）

On the glossary of Beowulf Edition in *Electronic Beowulf*

Ryoichi KOYAMA*

By using *Electronic Beowulf* CDs, we can see all the manuscripts in Cotton Vitellius A. XV on our own computer display, which will give us a great advantage in studying Old English and OE literature. In the CDs are also included a transcript of Beowulf MS and an edition of Beowulf text compiled by Kevin Kiernan. And the edition contains a comprehensive glossary. But through a close scrutiny, it would be obvious that the glossary has some deficiencies and errors. In this paper those deficiencies and errors are pointed out and corrected.

１．はじめに

Electronic Beowulf には、日本中世英語英文学会誌 No.16, 2001 の J. Scahill による version 1.0 の書評にも詳述されているように(1)、Cotton Vitellius A. XV にある全写本のカラーファクシミリが収録されており、Disc 1 には全写本のカラーファクシミリが、Disc 2 では、写本原形の見開きページの形と各ページがどのように綴られているかが示されている。*Beowulf* については、現存する写本と Thorkelin A, B 及び Conybeare と Madden の編集した edition、更に Kiernan による写本の transcript と edition 及び glossary が用意されている。

CD 版の利点の１つに画面分割が可能なことが挙げられよう。画面を分割して MS と Kiernan の text を並べたり、Beowulf と Thorkelin A, B 等の写本を並べて同時に比較することができ、それぞれ必要なページにジャンプすることも可能であるし、MS が不鮮明な箇所は拡大して見ることもできるようになっている。更に glossary の画面が独立していて、必要ならば画面を３分割して並べることもできるようになっている。Glossary は画面右に並んだアルファベットをクリックするとその文字で始まる単語が表示され、該当の単語にポイントを当ててもう１度クリックすると、その語の語形ごとの出現箇所が表示されるようになっている。version 1.0 では glossary 用の画面の大きさが変えられたが、2.0 では大きさが固定され、しかもかなり狭くなったため、かえって glossary が見づらくなってしまったが、その代わり 1.0 にはなかった単語検索用の window が追加されて、出現した変化形をその window に入力すれば、該当の単語に飛んでくれるので、原形が分からなくても検索が容易になったという利点が加わった。

このＣＤによって鮮明なＭＳが個々のパソコン画面で読めるようになったことと、画面

＊　物質生物システム工学科（教養）　准教授

分割によって他の edition との相互参照が容易になったことは、古英語研究に大いに役立つものと思われる。

しかし、diplomatic edition ではないものの、非常に conservative な Kiernan の edition には MS を尊重するあまり、問題もあり、commentary や現代語訳等がないため、解釈の手がかりは punctuation と glossary のみであるが、glossary にも説明や訳語の不足と誤りが、version 2 で訂正されたとはいえ、まだかなり見受けられる。本稿ではこの glossary の不足と誤りを指摘し、今後の研究の一助としたい。なお、本稿は、平成１８年１２月の日本中世英語英文学会、第２２回研究発表会での研究発表『Electronic Beowulf の text と glossary について』の glossary に関する部分を増補したものである。

なお例文の行数字は、例の始まる行ではなく該当の語句のある行を示し、OE 表記とともに Klaeber (1950)(2)のものであり、括弧内の行数字は Kiernan の edition の行数字である(3)。日本語訳は Karibe-Koyama (2007)(4)のものを利用した。

2．Glossary に不足している点

*Electronic Beowulf*の glossary には単語の全語形と出現箇所が網羅されているという大きな利点があるが、見劣りする点が２点ある。それは、用法の説明と、語義分類の不足である。

２－１．説明の不足

２－１－１．gewītan とともに使われている dat.の代名詞

26a. Him ðā Scyld gewāt 「さてシルドは出発した」のように移動を意味する動詞 gewītan とともに使われている dat.の代名詞が reflexive ではなく、普通の dat.と一緒にされている。これは全部で８例あるが、Klaeber (1950)の glossary では reflexive に分類されている。

その他の例は 234a. Gewāt him þā tō waroðe「それから彼は岸辺に行った」、301a. Gewiton him þā fēran.「それから彼らは出発した」、662a.(661a.) Ðā him Hrōþgār gewāt「それからフロースガールは退出した」、1125a.(1124a.) Gewiton him ðā wīgend「やがて武士たちは出発した」、1236a.(1238a.) ond him Hrōþgār gewāt「やがてフロースガールは赴かれた」、1601b.(1603b.) Gewāt him hām þanon「そこから帰還した」、1903b.(1906b.) Gewāt him on naca「船は出発した」、1963a.(1966a.) Gewāt him þā se hearda「いよいよ、かの勇士（B）は出発した」、2387a.(2388a.) ond him eft gewāt「それで帰って行った」、2949a.(2950a.) Gewāt him ðā se gōda「すると勇敢な王は出発した」である。

なお、1903b.(1906b.) Gewāt him on naca「船は出発した」の箇所は MS では nacan となっており、Kiernan は MS 通りに読んで主語に「Beowulf 一行」を補って解釈しているが、いずれの場合でも him は reflexive である。

また、Klaeber は 2819b.(2820b.) him of hræðre gewāt の him も同じ reflexive に採っているが、ここは「彼の胸から旅立った」の意味で reflexive ではなく、possessive dat. であろう。

Kiernan の glossary には、671a.(670a.) Ðā hē him of dyde の him のように、used

reflexively とされている him も他にあるので、この gewītan とともに使われる用法も reflexive とすべきである。

2－1－2．dat.やgen.を目的語にする動詞・形容詞

106. siþðan him Scyppend　forscrifen hæfde「彼を創造主が　追放して以来」の forscrīfan は dat.を目的語にする動詞で、Klaeber の glossary では w. dat.と記載されているが、Kiernan の glossary には *to doom, condemn* と語義があるだけである。この類の動詞は onfōn, wealdan, brūcan 等多数あるが、全て用法の説明は省略されている。

2－1－3．非人称構文をとる動詞

67b. Him on mōd bearn の beirnan 'to run; of thought: to occur to'のように非人称構文をとる動詞についても、語義から推測されるものの、impersonal という説明はない。

同様に 1598b.(1600b.) þā ðæs monige gewearð「その時は多くの者に思えたのだ」の gewearð も impersonal use であり、Klaeber の glossary には to suit, seem good; impers., w. acc. of person & gen. of thing.という説明があるが、Kiernan にはその旨の記述はない。

2854b.(2855b.) him wiht ne spēow「(Wilaf は傷ついた Beowulf を水で蘇生させようとしたが) 成功しなかった」の speow も wiht を主語に採れば personal use であるが、acc. とされているので impersonal use と解釈されるが、明記されていない。

þyncan については、687b.(686b.), 1341a.(1343a.), 1748a.(1751a.), 2653a.(2654a.), 3057b.(3059b.)が impersonal、368a., 842a.(841a.)が personal use であるが、改訂版 (2.0) で in impersonal constructions, 'it seems to one'という説明が追加された。

また wyrðe や gemyndig のような形容詞についても with gen.といった説明が欠如している。

2－1－4．possessive dative

2714a.(2715a.) þæt him on brēostum　bealonīð(e) wēoll,「(彼には分かった　毒が) 彼の胸の中で　激しく沸き立つのが」の例に見られるように、OE でしばしば現れる possessive dative についても指摘されていない。他に possessive dat.は 47a., 49b., 67b., 1547b.(1549b.), 1566a.(1568a.), 1774a.(1777a.), 1878a.(1881a.), 2043b.(2046b.), 2180b.(2183b.), 2295a.(2296a.), 2307a.(2308a.), 2361a.(2362a.), 2404b.(2405b.), 2419b.(2420b.), 2448a.(2449a.), 2507a.(2508a.), 2628a.(2629a.), 2632b.(2633b.), 2775a.(2776a.), 2809a.(2810a.)にあるが、全て指摘はない。

2－1－5．その他

名詞の副詞用法等も言及がない。

2137a.(2140a.) Þǣr unc hwīle wæs　hand gemǣne;「そこではしばらく我ら二人は手合わせをしました」の hwīle は adverbial であるが、Kiernan の glossary には、hwile は acc.sg. of hwil, fem., *while, space of time.* とだけあって adverbial という説明はなく、adverbial は hwilum 'sometimes, at times, now and again, formerly' のみが挙げられている。なお Klaeber でも dat.pl.以外の形で adverbial の表示がないが、ここは adverbial である。

連語・句の扱いについても、phrase で表示した方がわかりやすい場合でも、ほとんど個別の単語に分けて意味をつけている。

76b. Him on fyrste gelomp, 「人々にやがて起こった」の on fyrste は、Kiernan では2語に分けて、on: prep., 'on, in, at, among' , first: m., 'space of time, allotted time'と glossary に記載されていて、どちらにも特に説明がないが、Klaeber は note (p.129)で 'in due time'と説明している。

また 426b.(425b.) Ic þē nū ðā, / ... biddan wille, 「そこで今私は殿に / ... (お願いを) いたしたいのです」の nū ðā も nū: adv., 'now'と ðā: adv., 'then'に分けられているが、OED nowthe の項にあるように2語で now の意味である。

1555b.(1557b.) on ryht (= rightly), 1616b.(1618b.) tō þæs (= to that degree, so), (also in 714b.(713b.), 1366b.(1368b.), 1509b.(1511b.)), 1918b.(1921b.) þ^ læs (= lest) 等も別々に扱っている。なお þā g^t, þā gīt (= still, now, yet)(47a.,536b.(535b.),1164b., 1256b.(1258b.), 1276b.(1278b.), 2141b.(2144b.), 2975b.(2976b.))については、CD1.0 では1語ずつに分けてあったが、CD2.0 で連語の項が新設された。

2－2．語義分類

同じ単語でも context によって意味が異なる場合があるが、語義分類が大まか過ぎて、ふさわしい場合分けがなされていなかったり、適切な訳語が無かったり、反対の意味が同時に挙げられたりしている場合が多数見受けられる。

OE は現代英語に比べると前置詞の数が少ないため、その意味は前後関係に依存する度合いが大きいが、Kiernan の glossary では殆んど字面の意味だけが与えられているだけで、Klaeber のそれに比べると大まかに過ぎると言わざるをえない。

581b.(580b.) Nō ic wiht fram þē / swylcra searonīða secgan h^rde,「我は君について少しも / そのような闘いが 語られるのを聞いたことがない、」で、ここの fram は concerning の意味であり、Klaeber では、ここと、532 行、875 行が of, concerning に分類されており、意味が分かりやすくなっているが、Kiernan では、前置詞 fram の訳語はすべて from, away from しか与えられていない。

733a.(732a.) mynte þæt hē gedælde, ... / atol āglæca ānra gehwylces / līf wið līce, 「彼は離そうと思った … / 恐ろしい怪物は 一人一人の / 命を体から、」では gedælan ... wið で 'sever ... from' の意味であるが、wið は with, within, from の項にあるだけで用法の説明はない。with と from では意味が違うので分けるべきである。

1864a.(1867a.) Ic þā lēode wāt / ge wið fēond ge wið frēond fæste geworhte, 「わしは承知しているこれらの国民が / 敵味方に対しても しっかり心構えができているのを、」でも prep., wið が with, within, from の項に分類されているが、ここは against, toward の意味であるので分類の間違いである。同じ例が他に 3 例 2520a.(2521a.), 2521b.(2522b.), 2528a.(2529a.)にある。

また、前置詞 ofer には over, across; beyond, contrary to, against, after と分類なしで多数の訳語が羅列されており、場合分けが必要と思われる。

前置詞以外の語で訳語が不足しているものも多々見られる。

Grendel を指す aglæca は訳語に opponent, warrior, fighter だけで monster, fiend,等が欠けている。また aglæcwif (1259a.(1261a.))も female warrior, fearsome woman の訳語の

みしか挙げられていない。

Grendel を退治した後の宴会の場面、1013b.(1012b.) Bugon þā tō bence　blædāgande,「それから長椅子に座して　繁栄せる者たちは」で、名詞 blæd には fame, glory, success, prosperity, happiness の訳語が与えられているので、ここの訳語は prosperous one が適当であるが、brave one とされていて、prosperous one の訳語はない。Klaeber では形容詞は prosperous, glorious、名詞 blæd は power, vigor of life, glory, renown となっており、Wrenn-Bolton (1973)[5]では、それぞれ having power or glory; prosperous、と vigour; glory; prosperity; fame、Jack (1994)[6]では、possessing glory、Mitchell-Robinson (1998)[7]では glorious one, possessors of glory となっており、Hall (1960)[8]の辞書にも brave の訳語はなく、Kiernan が何故ここを brave one としたのか疑問である。

1665b.(1667b.) þā mē sæl āgeald, では、āgeald は to repay, pay back.とされているが、'when chance pay back me' では意味不明である。Klaeber では permit, make possible となっていて、'when I had an opportunity'と意味が通る。

せっかく語義が分類されているのに間違って分類されている場合もある。

847b.(846b.) Ðær wæs on blōde　brim weallende,「そこ[湖]では血で　水が沸き出していた、」は Grendel の足跡をたどって、住処の沼へ行く場面であるが、Kiernan はこの brim を sea, ocean, waters of the sea の項に入れてある。しかし他に referring to the waters of Grendel's mere(1596 のみをここに分類)の項をわざわざ別に設けているのでそちらに入れるべきである。

991a.(990a.) Ðā wæs hāten hreþe　Heort innanweard / folmum gefrætwod;「それから急いで命じられた　ヘオロトの内部が / 手（の技）で飾られるようにと；」の hāten が、動詞 hātan を Ⅰ. to name, call と Ⅱ. to order, command に分けているにも係わらず Ⅰ. to name, call に入れてあるが、当然 Ⅱ. to order, command の項にあるべきである。なおこの箇所で Klaeber が with inf.としているのは間違いである。

Grendel とその母親を倒して、Beowulf 一行が帰途に就く場面の 1882b.(1885b.) Sǣgenga bād / āge[n]dfréàn,海行く船は待っていた / 船主を」で、Kiernan は、動詞 bīdan を to wait, stay, remain, dwell と to await と to experience, endure の 3 つに分類しているが、ここの bād は to await の意味が適当だと思われるが、敢えて to experience, endure の項に入れてある。

3044a.(3046a.) lyftwynne hēold / nihtes hwīlum,「飛行を楽しんで / 夜間に」では、hwīlum を dat.pl. of hwīl, fem., adverbial: sometimes, at times としてある。しかし nihtes hwīlum は「夜間に」の意味で adverbial ではあるが、ここの hwīlum 自体は 'sometimes, at times'の意味ではなく、名詞 while, period of time の adverbial use なので、while, space of time の項に移動させるべきであろう。Klaeber はここの hwīlum を Kiernan と同じく adverbial に分類し、note (p.225)で、Hoops の'at the time of night'の解釈に対し、hwīlum が adverbial でない例は他にない（'It would be the only instance in OE. poetry where hwīlum is not used adverbially.'）と言っているが、Dobbie (1953) では Earle の解釈 'During the hours of night'をよしとし、Bugge の'at times by night'という解釈を、'though

defensible, seems on the whole less probable.'として退けている(9)。

3．Glossaryの間違い

文法・用法の説明や語義分類の緻密さの欠如については、このeditionが初学者向けのものではないのでどうしてもそれらが必要というわけではないが、それ以外に間違いと思われる箇所もかなり存在するので、以下に例で示すことにする。

3－1．代名詞の解釈

3－1－1．cataphoric that

まず目に付くのがcataphoric that等をほとんどconj.に分類している指示代名詞の解釈（提示？）の誤りである。

632a.(631a.) 'Ic þæt hogode, ... þæt ic ānunga　ēowra lēoda / willan geworhte,は、'I resolved it ... that I would by any means carry out your people's wish'（拙訳）の意味で、前のþætはsubst., neut. acc. sg.のはずであるが、Kiernanはconj.に分類している。

809a.(808a.) Đā þæt onfunde　... / þæt him se līchoma　lǣstan nolde「その時気づいたのだった　… / 肉体が己に　従おうとせずに」でも、前のþætはcataphoricで後ろのþæt clauseと相関する代名詞（neut. acc.sg.）であるが、conj.に分類されている。

この種の例は数多く、1345a.(1347a.)、1591a.(1593a.)、1826a.(1829a.)、2219b.(2222b.)、2651a.(2652a.)、2713b.(2714b.)、2836a.(2837a.)、2864a.(2865a.)でもconj.とされているが、全て代名詞である。

1185b.(1187b.) gif hē þæt eal gemon, / hwæt wit tō willan　ond tō worðmyndum / umborwesendum ǣr　ārna grfremedon,「もし彼がそのすべてを忘れなければ、 / 我ら二人が彼の喜びと　名誉となるように / 幼いときに　どれだけ恩恵を施したかを」のþætはhwæt以下の節と相関する代名詞である。改定後は？が付けられているが、これもconj.とされている。

734b.(733b.) Ne wæs þæt wyrd þā gēn, / þæt hē mā mōste　manna cynnes「もはや彼の運命ではなかった、 / 彼がもっと多くを食べられるのは　人間を」では、前のþætをnns. demon. adj. and def. art., *that, the*と分類しているが、ここも後ろのþæt節を受けるcataphoric thatである。前のþætをwyrdにかかる冠詞と採ったらしいが、wyrdはfem.なので性が不一致である。

逆に、1935a.(1938a.) nǣnig þæt dorste　dēor genēþan / ... / þæt hire an dæges ēagum starede;「いかなる勇敢な者も　このことは敢えて行わなかった、 / 即ち彼女を昼間　両眼でまともに見ることを；」では1933a.(1936a.)のþætはsubst. neut. acc. sg.と正しく解釈しているにもかかわらず、1935a.(1938a.)のþætをrel., *who,*と関係代名詞に分類している。

ではこのようなcataphoric thatが全て無視されているかというと、少数ではあるが正しく解釈されている箇所も存在する。

415a.(414a.) Þā mē þæt gelǣrdon　lēode mīne, / ... / ...　þæt ic þē sōhte,「すると私を説得しました、　わが国人らが、 / …　私があなたを訪れるべきだと、」については、前のþætをsubst., *that,* neut. acc. sg.に、後ろのþætをconj.にというふうに正しく分類がなさ

れている。

2300b.(2301b.) hē þæt sōna onfand, / ðæt hæfde gumena sum　goldes gefandod,「龍にはすぐに分かった / ある男が　黄金を探し出したことが、」も同様である。

1598b.(1600b.) þā þæs monige gewearð, / þæt hine sēo brimwylf　ābroten hæfde.「その時は多くの者に思えたのだ、 / 彼を海に棲む雌狼が　倒したように。」は þæs と þæt 節の呼応であるが、この 1598b.(1600b.)の þæs は subst.,と、正しく分類されている。

778a.(777a.) Þæs ne wēndon ǽr　witan Scyldinga, / þæt hit ā mid gemete　... / ... tōbrecan meahte,「思ったこともなかった、　シュルディンガスの賢人たちは、 / それをいつかなんらかの方法で / …　壊せるとは、」も同様であるが、ここで挙げた 778a.(777a.)の Þæs は同じ gen.でも上の例のそれとは違って副詞的な使い方ではなく、動詞 wēndon の目的語である。

折角正しく構文が把握されている箇所もあるのに、間違って分類されている箇所が多いのは残念である。

3－1－2．指示代名詞・冠詞のその他の取り違え

it ... that 構文を構成する指示代名詞以外にも冠詞と名詞、関係代名詞と名詞、関係代名詞と冠詞など取り違えているものがある。

205a. Hæfde se gōda　Gēata lēoda / cempan gecorone「この勇士は　イェーアタスの人々の中から / 武士たちを選んだ、」の se は明らかに the (brave)の意味で冠詞の働きであるが、Kiernan では subst. one, that one, that, he, it に分類されている。

逆に 3157b.(3159b.) Geworhton ðā　Wedra lēode / hl(ǽw) on [h]līðe,　sē wæs hēah ond brād,「それから築いた　ウェデラスの国民は / 岬に塚を、　それは高く大きかった、」の sē を、Kiernan は冠詞・指示形容詞としているが、subst.か rel.の項に移動すべきである。なお、3157a.(3159a.) hl(ǽw) on [h]līðe,は MS の傷みが激しく editor によって読みが異なるが、意味はいずれも「丘の上に塚を」といった内容である(10)。

また、1977b.(1980b.) Gesæt þā wið sylfne　sē ðā sæcce genæs,「やがて王自身の向かいに座した、　戦に生き残った者は」では se を Kiernan は subst. one, that one, that, he, it に分類しているが、rel., the one who, he who,が適当である。

2503a.(2504a.) nalles hē ðā frætwe　... / ...　bringan mōste,「彼は飾り武具を　…持ち帰ることはできず、」の ðā が adv., *then* とされているが、次語の frætwe (fem., acc.pl.)を修飾する冠詞・指示形容詞とするほうが自然であろう。

次の例は、代名詞と接続詞の取り違えである。

1667b.(1669b.) Þā þæt hildebil / forbarn brogdenmǽl,　swā <u>þæt</u> blōd gesprang,「するとその鉞の浮いた戦刀は / 燃え尽きたのです、　あの血が吹き出すや否や、」の þæt を Kiernan は when, as a result, as long as, as soon as, so that の項に入れているが、as soon as はこの前の swā で、ここは neut. nom. sg. of demon. adj. and def. art., that, the が適当である。

なお þæt を副詞節を導く接続詞に分類したこの項には他に 563b.(562b), 1098a., 1664b.(1666b)が挙げられているが、563b.(562b)は接続詞'when'、1098a.は oath の内容を

表す that 節、1664b.(1666b)は'as a result, so that'の意味である。

2384b.(2385b.) Him þæt tō mearce wearð;「それが王子の命を奪った；」

2500a.(2501a.) þæt mec ǽr ond sīð　oft gelǽste,「この剣はずっと　よくわしに仕えてくれた、」でも þæt はそれぞれ前の文の内容や前出の語を受ける指示代名詞であるが、conj. that, so that に分類されている。

3－1－3．その他

reflexive でないものを reflexive にしたものが 6 例ある。

1242a.(1244a.) Setton him tō hēafdon　hilderandas,「(彼らは) 頭のところに置いた戦の楯を、」は典型的な possessive dat.の形であるが、Kiernan は dat. pl., them, used reflexively としてある。また、2335b.(2336b.) Hæfde līgdraca　lēoda fǽsten, / ... / glēdum forgrunden;　him ðǽs gūðkyning, / ...　wræce leornode.「火龍は　国民の砦を、 / … / 炎で焼き尽くした；　それに対し戦を好む王、 / …　復讐を企てた。」の him も used reflexively として「王自身が」と解釈しているが、それならば self が使われるのではないか。līgdraca (= dagon)を指す普通の dat.であろう。他の 4 例は、

1269a.(1271a.) þǽr him āglǽca　ætgrǽpe wearð;

1314a.(1316a.) hwæþ*er* him Aǽwalda　ǽfre wille

2337a.(2338a.) Heht him þā gewyrcean　wīgendra hlēo

2347b.(2348b.) nō hē him þ*ā* sǽcce ondrēd,

であるが、いずれも reflexive ではない。

724b.(723b.) Raþe ǽfter þon / on fāgne flōr　fēond treddode,「その後すばやく / モザイク模様の床を　敵は踏みつけ、」の þon を? with comparative: *the, any.*としてあるが、ここは with comparative ではない。

指示代名詞ではないが、次の ðǽr の用法分類は誤りである。

1299b.(1301b.) Næs Bēowulf ðǽr, / ac wǽs ōþer in　ǽr geteohhod と 2122b.(2125b.) þǽr wǽs Æschere, / ... feorh ūðgenge.のどちらも expletive としてあるが、両方とも there is 構文ではない。

3－2．格の間違い

格の間違いと思われる箇所は CD1.0 で 43 箇所あり、その内 12 箇所は CD2.0 で修正されたが、それでも 3 1 箇所がまだ未修正である。

418b.(417b.) forþan hīe mægenes cræft　mīn[n]e cūþon;「何故なら彼らは私の力業を知っていたからです；」で、mīn[n]e を Kiernan は mine のままにして masc. nom. pl. of min, poss. adj.,としているが、nom.では構文が成立しない。min の acc. sg. masc.の標準形は minne なので Grein.による min[n]e への emendation が普通踏襲されている。Klaeber でも acc.sg.masc.である。意味より MS を重視したための典型だと思われる。

2958b.(2959b.) Þā wǽs ǽht boden / Swēona lēodum,　segn Higelāce[s] は解釈の分かれるところで、Klaeber は note (p.223)で、ǽht を property の意味ではなく oht 'persecution' (glossary では pursuit) の variant とし、segn を次行の oferēodon の主語とすることで十分意味が通ると言っている。Kiernan は glossary から判断すると、ǽht を property の

意味にとり、Klaeber's note にある別解釈 ("then was (the) treasure offered (yielded) by the folk of the Swedes, their banner to H.") のように解釈しているらしいが、それでも segn は nom.でなければならないが Kiernan は acc. sg.としてある。

1151b.(1150b.) Đā wæs heal *r*oden「それから広間は染められて」の *r*oden を Kiernan は MS hroden のまま採用し、adj. (pp.) neut. acc. sg., *adorned, decorated.* としているが、heal (fem.)の補語なので nom.でなければならないところである。なお、Klaeber では roden: pp. of rēodan, st.2, to redden が採用されているが、Kiernan のように MS hroden のままでも「広間が血に染まった」という意味は汲み取れる(11)。Dobbie の note によると hroden とすると意味上は問題がないが、double alliteration になり、この時代の詩では疑わしいとのことである(12)。同様に

416a.(415a.) þā sēlestan,の þā が acc. pl.とされているが、masc. nom. pl.のあやまりである。

562a.(561a.) Næs hīe ðære fylle　gefēan hæfdon,の ðære が fem. dat. sg.とされているが、fylle: gen. sg. of fyllo を修飾する fem. gen. sg.が正しい。(Kiernan の glossary では fylle は dat. or gen.とされており、fylle を dat.として 前置詞なしで'at the feast'と取ることも可能ではあるが、gefēan を修飾する gen.と採るほうが自然だと思われる。)

750a.(749a.) Sōna <u>þæt</u> onfunde　fyrena hyrde, / þæt hē ne mētte の下線部 þæt を、ここは conj.ではなく demon. pron., subst., *that, that (one), it.*と正しく構文を捕らえているが nom.としているのは acc.の間違いである。

958a.(957a.) 'Wē þæt ellenweorc　ēstum miclum,の þæt も nom.は acc.の誤りである。

1777a.(1780a.) ic þære sōcne　singāles wæg では、þære が修飾する sōcne を gen.にしながら þære は dat.の項に入れている。

2046b.(2049b.) wīgbealu weccean, ond þæt word ācwyð:の þæt を nom.にしているのも acc.の間違いである。

2155a.(2158a.) 'Mē ðis hildesceorp　Hrōðgār sealed,の ðis: nom.は acc.の

2499b.(2500b.) þenden þis sweord þolað,の þis: acc.は nom.の誤りである。

779a.(778a.) þæt hit ā mid gamete　manna ænig / ... tōbrecan meahte,の hit が nom.とされているのも、fordbold (773a.)を受ける acc.である。

以下該当の語と誤りを列挙すると

lēode 1213b.(1215b.) acc.は nom.、inwitnīþas 1858a.(1861a.) acc.は nom. (前行の sacu と平行するが、sacu は nom.とされている)、gesīðas 2040a.(2043a.), 2518a. (2519a.) nom.はどちらも acc.、hyldo 2293a.(2294a.) nom.は acc.、æht 2314b.(2315b.) nom.は acc.、Hæðcyn 2434a.(2435a.), 2437a.(2438a.) acc.は共に nom.、cræft 2696a.(2697a.) nom.は acc.、hēafodwearde 2909b.(2910b.) nom.は acc.、(in ðām) [gūð]sele (Kiernan は [grund]s(ele)) 2139a.(2142a.) acc.は dat.の誤りである。

MS を重視する Kiernan が emendation を避けたため、構文が成立しないものがある。

2032b.(2035b.) Mæg þæs þonne ofþyncan　ðēod*ne* Heaðo-Beardna / ond þegna gehwām「だから不快にさせるでしょう　ヘアゾベアルダンの王と / すべての近侍の武士

を」では、Kiernan は ðēod*ne* を MS ðēoden のまま採用し nom. sg.としている。しかしここは非人称動詞 ofþynċan: to displease の目的語の dat.でなければ構文が成立しない。Dobbie の note (p.221)によると、Malone と Von Schaubert は ðēoden を取っているとのことであるが、それでも格は両者とも dat.である。

2076b.(2079b.) Þǣr wæs Hondsci | hil*d* onsǣge,「その時ホンドシオーには 命を脅かす闘いが起こりました、」でも、Kiernan は hilde と MS 通りに dat. sg.としているが、Hondsci | (Kiernan は Hondscioh)も dat.にしているため、意味・構文が成立しない。nom. hild への emendation が必要なのではなかろうか。

2514a.(2515a.) g^t ic wylle, / … … / mǣrð*u* fremman,「今でもわしは望んでおる、…武勲をたてることを、」でも、mǣrð*u* を普通はこのように acc.に emend し、fremman の目的語としているが、Kiernan は MS mærðum のまま dat. pl.としている。

３－３．性・数の間違い

1172a.(1174a.) ond tō Gēatum spræc / mildum wordum, (= and spoke to the Geats with mild words)の mildum が masc.dat.pl.とされているが、wordum の neut.と一致しなければならないように、若干の間違いがある。

3028a.(3030a.) Swā se secg hwata secggende wæs (= Thus the brave warrior was saying)の hwata が neut.になっているのも masc.の間違いである。 以下列挙すると、

1885b.(1888b.) þæt wæs ān cyning の ān が neut.とされているのは masc.

2014b.(2017b.) ne seah ic wīdan feorh の wīdan; wk.masc.は feorh: neut. acc.sg.を修飾する neut. acc.

2216a.(2219a.) hǣðnum horde の hǣðnum: masc.は neut. (horde が neut.)

2415b.(2416b.) næs þæt ^ðe cēap の^ðe: neut.は masc. (cēap が masc.) である。

次は数の不一致で、

3099a.(3101a.) swā hē manna wæs / wīgend weorðfullost (as he was, among men, the most worthy warrior)の wīgend が pl.,となっているが、主語の hē と数が一致しない。

1685a.(1687a.) ðǣm sēlestan では sēlestan が dat.sg.とされているにもかかわらず ðǣm は dat.pl.と数が不一致である。以下列挙すると、

1874a.(1877a.) ealdum infrōdum の infrōdum: dat.pl.は dat.sg.

2588a.(2589a.) grundwong þone の grundwong: acc.pl.は acc.sg.

3099a.(3101a.) wīgend weorfullost の wīgend: nom.pl.は nom.sg.

3147a.(3149a.) ðā bānhūs の bānhūs: acc.sg.は acc.pl.の間違いである。

３－４．動詞の人称等の間違い

動詞の人称等の間違いが全部で９箇所ある。

2775a.(2776a.) Ðā ic on hǣlwe gefrægn hord rēafian, / eald enta geweorc ānne mannan, / him on bearm hl*a*don bunan ond discas「その時私が聞いた話では塚の中で宝庫を略奪し、 / 古の巨人の作品を 一人の男が、 / 己の胸に抱えた 杯や皿を」の hl*a*don を Kiernan は MS 通りに hlodon: pret. 3pl. of hladan, st. 6, *to load, place, store.* とし、また mannan でピリオドを打って him からは別の文にしている。しかしながら対

応する複数主語が存在しないので（bunan ond discas は Kiernan も acc.pl.）、hlodon は語形は過去複数の形をしているが構文的に定形動詞とするのは無理である。Dobbie の note (259)にあるように従来多くの editors が行っているように hladan, hladon と emend し、rēafian と並ぶ不定詞と取った方が無難であろう。なお Dobbie, Wrenn-Bolton, Jack は Klaeber と同じく hladon に、Mitchell-Robinson は hladan と emend している。

2252b.(2253b.) Nāh, hwā sweord wege「わしにはいない、剣を帯びる者が」は、多くの editions でこのように解釈され、Nāh を pres. 1sg.としている。Dobbie によれば、この nah の前に２文字判読不明の文字があり、Holthausen, Sedgefield 等は ic を挿入しているとのことである。Dobbie も彼の edition で[ic] nah としている。しかし、Kiernan はここを[He] nah と emend しているにもかかわらず、glossary では nah を従来と同じ pres. 1sg.に分類しており、he の挿入と矛盾する。

3038a.(3040a.) ær hī þær gesēgan　syllīcran wiht, / ...　... / lāðne licgean;「彼らは既にそこに見ていた　見知らぬ生き物が / …　… / 憎むべきものが、横たわっているのを；」の gesēgan が gesēon の過去分詞とされているが、pret. 3pl.である。

主語と動詞の人称が不一致なものは、

1477b.(1479b.) scolde が pret. 3sg.となっているが、主語は ic (1477a.(1479a))なので 1sg.でなければならない。逆に

1855b.(1858b.) sceal が pres. 1s.となっているが、主語は sib 'peace'(1857a.(1860a.))なので 3sg.である。同様に

1862a.(1865a.) Sceal: pres. 1sg.は 3sg.（主語は直後の hringnaca）

2255a.(2256a.) Sceal: pres. 1sg.も 3sg.（主語は直後の se hearda helm）

3018a.(3020a.) sceal: pres. 1sg.も 3sg.（主語は eorl(3015b.(3017b.)) と mæġð (3016b.(3018b))

2659b.(2660b.) sceal: sceal: pres. 1sg.も 3sg.（主語は直後の sweord から scrūd まで）である。

３－５．品詞の取り違え

前記３－１．指示代名詞に関するもの以外の品詞の解釈に対する疑義又は記載上の不備である。

1849b.(1852b.) ond þū þīn feorh hafast,の hafast を、Kiernan は auxiliary の項に分類しているが、前後に本動詞に相当するものがなく、この hafast は意味の上からも have の意味の本動詞である。

866a.(865a.) Hīwlum heaþorōfe　hlēapan lēton, / ...　fealwe mēaras, / ðær him fold wegas　fægere þūhton,「時には戦に猛々しい者たちは　駆けさせ、 / …　栗毛の馬を、 / 彼らに地面の道が　ふさわしく思えた所では」の ðær を dem. adj., then, there としているが、rel., where, when の方が正しい。

1951b.(1954b.) ðær hīo syþþan well の syþþan は conj., since とされているが、adv.が正しく、逆に 2201b.(2204b.) syþþan Hygelāc læg の syþþan は adv.ではなく conj.で、2207a.(2210a.) syþþan Bēowulfe　bārde rīce / on hand gehwearf; と相関し 'after

Hygelac lay dead ... then the broad kingdom passed into Beowulf's hands.'(13)の意味になる。

2003b.(2006b.) wearð on ðām wange, þǣr hē worna fela の þǣr が demon. adj., *there.* とされているが、直前に先行詞 wange 'place, land'があり、rel. adv.が適切である。

2882b.(2883b.) *W*ergendra tō l^t を Kiernan は Fergendra tō l^t と emend し、tō を prep., *to, towards.* としているが、*W*ergendra も Fergendra も gen.pl.であり、tō は前置詞ではありえない。adv., too である。

3－6．語義

語義に疑問のある箇所も多数あるが、emendation や解釈の仕方によっては必ずしも間違いと言えないものもあり、ここでは2，3の明白な例を挙げるにとどめる。

600a.(599a.) ac hē lust wigeð, / swefeð ond s[nē]deþ (Kiernan では sendeþ),の swefeð を Kiernan は pres. 3s. of swefan, st. 5, to sleep. sleep in death と自動詞にしている。しかし、Klaeber にあるように、自動詞ではなく他動詞で swebban, w. 1, to (put to sleep), kill, が適当であると思われるが、Kiernan の glossary には swebban の記載がない。

1136a.(1135a.) wuldortorhtan weder.の wuldortorhtan を Kiernan は wonder-bright と訳を付けているが、wuldor と wundor の取り違えではないかと思われる。Kiernan でも名詞の wundor は glory となっているので、Klaeber, Wrenn-Bolton, Mitchell-Robinson, Jack の'gloriously bright'が正しい。

1504a.(1506a.) þæt hēo þone fyrdhom ðurhfōn ne mihte,「彼女は武具を 突き通すことができなかったのだ、」の fyrdhom を Kiernan は war-home, armor と訳している。war-garment, corslet という意味は同じであるが、ここの hom は under-garment を意味する ham で、Kiernan の'war-home'は ham を'home'と取り違えたのではないかと思われる。

2215a.(2218a.) Þǣr on innan gīong / nið[ð]a nāthwylc,の nið[ð]a (Kiernan の edition では nið(a)) を Kiernan は masc. gen.pl. of nið, malice, envy; war, conflict; hostility, persecution, trouble, oppression としているが、どれを取っても意味不明である。gen.pl. of niþðas, masc. pl., men の誤りでる。

3－7．単純ミス

以下に列挙するのは単純なミスである。(該当の語に下線を施してある。)

3－7－1．転写の間違い

263b. Ecgþēow <u>hatan</u> は MS 画像では明らかに haten であるが Kiernan の edition と transcript では hatan になっている。glossary でも pp.の項に入れてあり、分類は正しいが語形は hatan になっている。

3－7－2．記載場所の混同

723a.(722a.) onbrǣd <u>þā</u> bealoh^dig, <u>ðā</u> (hē ge)bolgen wæs, (= evil-intending (one) swung open when he was enraged,)を Kiernan では þā を conj., *when.* とし、ðā を adv., *then* としているが、逆である。

1339b.(1341b.) mihtig mānscaða, wolde hyre <u>mǣg</u> wrecan, / gē feor hafað fǣhðe gestǣled, / þæs þe þincean <u>mǣg</u> þegne monegum, (= mighty evil-doer, would revenge

her kinsman, and has avenged her feud that far as it may seem to many a thane,)でKiernanは前者のmægをpres. 3sg. of maganとし、後者のmægをmasc. acc.sg., *kinsman, blood relative*としているが、両者が逆である。

その他1707a.(1710a.)のswāをadv., *so, thus, likewise*とし、1709b.(1712b.)のswāをconj., *as, just as*にしているが、これも逆である。また3127b.(3129b.)のǽnigneがpron. any, anyoneの項にあり、3129b.(3131b.)のǽnigがadj. ǽnigneの項にある。

3－7－3．edition本文とglossaryの記載矛盾

744b.(743b.) eal gefeormodがedition本文ではealgefeormodと1語になっているが、glossaryではeal: adj., neut.acc.sg.とgefeormod: pp. of gefeormianの2語に分けて記載されている。(2語が正しい。)

また、1888b.(1891b.)のfelaとmōdigraがeditionでは2語に分かれているが、Glossaryでは1語[masc.gen.pl. of felamodig, adj., *very brave.*]で記載されており、またmodigra単独の項にこの箇所が記載されているが、felaの項にはこの箇所の記載がない。なおKlaeber他は1語である。同様に、

2938b.(2939b.) on(d longe)もeditionは2語に分かれているが、glossaryではandlong, andlangと1語である。

2354b.(2355b.) læsestが、glossaryではlæssestとsが1つ多い形になっている。(MSはlæsest)

3－7－4．記載場所の間違い

2619a.(2620a.) þēah ðeがCD1.0ではþeah þeの項にあったがCD2.0で修正された。しかし、Ðā (2283b.(2284b.))は þā の項に、ðǽr (2314b.(2315b.))は þǽr の項に、ðē (2635b.(2636b.))はþeの項に入ったままで2.0でも修正されていない。

3－7－5．行表示の間違い

2569a.(2570a.) Gewātがglosaryで187r4:2507と表示されているが、2507には該当語はなく、2570の誤りである。以下列挙すると、

2769a.(2770a.) gelocen：l.2270は2770、

2930b.(2931b.) bryda：193v15-16:2957は193r17:2931の誤り（2957が2箇所連続）

3062b.(3064b.) Wundur：3062は3064の誤り

3109a.(3111a.) Waldendes：3311は3111の誤り

3147a.(3149a.) ða：3148は3149の誤り

3167a.(3169a.) on：198v12:316は3169の誤り

3168b.(3170b.) wæs：198v13:3169は3170の誤りである。

3－7－6．double booking

589b.(588b.)のwitがpers. pron.の項とneut., wit, intelligence, councilの項の両方にあるが、ここは、代名詞の方は間違いで、名詞である。以下同様に、

1130a.(1129a.) þeah þeが þeの項のconj. þeah ðeとþeahの項のþeah þeにも

2251b.(2252b.) Þaがadv., ðaと rel.,nom.pl.の項に

2649b.(2650b.) þenden hyt sy, / glēdegesa grimでhytがnns. 3rd-per., pers. pron., *it.*

と fem. heat の項の両方に記載されているが、gledegesa と並ぶ名詞が適当である。

3－7－7．記載漏れ

以下の語句は glossary で記載漏れになっている。

649b.(648b.) ofer, 1144a.(1143a.) selest, 1590(1592b.) hine, 1612a.(1614a.) þæm, 1846a.(1849a.) þæt, 1846b.(1849b.) þæt, 2251b.(2252b.) þis, 2509a.(2510a.) sweord, 2857a.(2858a.) ne, 2857a.(2858a.) ðæs, 2986a.(2987a.) on

また、Ohteres (2380b.(2381b.)), Ohthere(s) (2928b.(2929b.))は最初の画面には gs.とあるが、クリック後の出現箇所を示す画面では gs.の記述がない。

seon は CD1.0 で漏れていたが（geseon はあり）、CD2.0 で新設された。

onsawon 1650b.(1652b.) < onseon も CD1.0 では漏れていて、on: adv. *on,* のみがあった。（edition は 1 語）。CD2.0 で onseon が追加されたが、adv. on の項にはまだ残っており、seon の項にも入れてある。

3－7－8．その他

gelicost (727a.(726a.)), (1608b.(1610b.))が comp.としてあるのは supl.の誤りである。なお、Klaeber でも訳は LIKEST となっているが、Comp.とされている。

eotenisc: adj., nas., *of or made by a giants.*と矛盾した書き方になっている。

4．おわりに

以上、発見した疑問点・間違い箇所を列挙したが、*Electronic Beowulf* は MS を忠実に提示しようという意図は果たされており、その点については大いに評価できるが、意味の不明な箇所をどのように解釈するかという問題は未解決な部分が多い。Kiernan による Note や現代語訳がついてなく、解釈には glossary と punctuation だけが頼りなので、CD2.0 で修正された箇所もあるが、もう少し glossary の正確さが望まれるところである。

註

(1) John Scahill: Kevin Kiernan, with Andrew Prescott, Elizabeth Solopova, David French, Linda Cantara, Michael Ellis and Cheng Jiun Yuan, eds.: *Electronic Beowulf,* The British Library and The University of Michigan Press, 1999. 2 CD-ROMs.: Studies in Medieval Emglish Language and Literature, No.16. 2001, pp. 63-69

(2) Klaeber, Frederick, ed., *Beowulf and the Fight at Finnsburg.* 3rd ed.D.C. Heath, 1950.

(3) Kiernan は独自の主張により行編成を変更し、伝統的な 3182 行ではなく 3184 行としている。

(4) 苅部恒徳、小山良一編著：古英語叙事詩『ベーオウルフ』対訳版；研究社．2007.

(5) Wrenn, C.L., ed., *Beowulf with the Finnesburg Fragment.* 3rd ed., rev., by W.F. Bolton. Harrap, 1973.

(6) Jack, George, ed., 1994. *Beowulf: A Student Edition.* Oxford U. P., corrected 1995.

(7) Mitchell, Bruce & Fred C. Robinson / M & R, eds., 1998. *Beowulf: an edition with relevant shorter texts.* Blackwell.

(8) Hall, J. R. Clark, ed., A Concise Anglo-Saxon Dictionary. 4th edition. Cambridge U. P., 1960.

(9) Dobbie, Elliott Van Kirk, ed., *Beowulf and Judith.* The Anglo-Saxon Poetic Record, IV. Columbia U. P., 1953. p. 270.

(10) MS: hl ... on hoe, Dobbie: hleo on hoe, Wrenn-Bolton: hlēo on *hōe,* Jack: hl*æw* on *hō*e, M-R: hlæw on hlīðe

(11) Dobbie, Wrenn-Bolton, Jack, Mitchell-Robinson は roden。

(12) Dobbie, Elliott Van Kirk, ed., *Beowulf and Judith.* The Anglo-Saxon Poetic Record, IV. Columbia U. P., 1953. p. 183.

(13) Jack, p. 156.